アクティブラーニング型授業「舞姫」の場合
—まとめ学習における認知プロセスの外化と内化（下）—

小川　満江

１　はじめに

「舞姫」の授業実践において、内化—外化—内化の学習サイクルを繰り返してきた。本文全体を読む→担当箇所について理解したこと・気づいたこと・考えたことなどを整理し、発表資料を作成する→資料をもとに発表する→意見のやりとりをする→意見文や「その後の物語」を書く、という流れである。これまでその流れに沿って授業展開の方法や実態を整理し、分析してきた。

意見文等を書くことで生徒はまとめとしての外化を果たしたことになる。どの年度も、生徒の意見文のすべてを、授業者が打ち直し、プリントにして配布している。他者の意見文を互いに読ませるためである。また、外化したことを再び内化させるために、生徒に応じて次のような点についてコメントを書き返却した。〈○誤字・脱字　○適切な語句の用い方　○語句のつなぎ方　○書いていることへの問いかけ　○表現や展開の仕方について優れていると思う点　○書いている内容に対して共感する点　○生徒の見解への感想　○もっと説明がほしい点　○考え方の提示〉

他者の意見文を読み合い、受け止めたとき、生徒には内化活動が起こっていたと考えられる。授業時間の都合上、読み合って単元を終えた年度もあるし、内化をうながす活動を行って終えた年度もある。本稿では、意見文を読み合った後で実施した内化につながる学習を整理し、考察していきたい。

２　グループ学習

（１）　意見文をもとにグループで話し合いをする

平成２３年度と平成２４年度は豊太郎という人物を肯定的にとらえるか否定的にとらえるかということについてグループで話し合いをしている。話し合いの手順は次の通りである。〈・自分の考えを文章にまとめる・各自が書いたものをグループ内で報告し合い、意見交換する・グループ内での意見をまとめ、代表者が全体に報告する〉

グループ活動における内化活動は次のようであった。

・立場を決めて書いたものをもとに話し合いをすることで、それぞれの考えが速やかに他者に提示され、受け止める側も他者の考えを速やかに内化した。自分と同じとらえ方に触れた場合は、自身の考えを再確認して深め、別のとらえ方に触れた場合は、人物像把握に広がりや深まりを持たせた。

・クラス全体への報告の前に、グループの意見を整理する過程で、各自の言いたいことの要点を確認しあうという内化活動があった。

（２）　「その後の物語」をグループで創作する

平成２３年度の授業で実施した。手順は次の通りである。〈・自分の考えた物語を出し合う・話し合う中で、提示された物語に修正や付け加えをし、一つの物語にまとめる・代表者が全体に報告する〉

外化された物語に対して修正や付け加えを行い、一つの作品にまとめ上げる過程は内化活動と考

えられる。グループで話し合って完成した作品は、独りよがりのものにならず、みなが納得した作品として紹介された。メンバーが提示した作品の中に特にすぐれたものがあれば、それがグループの作品として発表されるケースもあり、その場合は物語作成に当たって試行錯誤はあまりないまま、メンバーに内化され報告された。

３　全員の文章を読んだあと「『意見文』『その後の物語』を読んで学んだこと」を書く

平成２７年度に実施した。本年度は授業中のやりとりも活発で様々な見解を出し合っている。意見文は、授業中のやりとりを振り返りつつ、独自の視点からテーマ設定をして書いており、個性的な文章が多かった。「学んだこと」については、どの生徒も４００字程度で、丁寧にまとめている。「学んだこと」として書いていることに、内化のありようが見られた。次の６項目に整理した。

①　多様な読み方・とらえ方をうながす「舞姫」という作品の価値について

次のような生徒の感想があった。

○意見文を読んで、一つの物語に対しても、いろいろな見方、解釈があるのだなと実感した○色々な点から意見が述べられていておもしろかった○人によって同じものに対しても着目点が微妙に違ってたから読んでいてとてもおもしろかった○「舞姫」のように、意見や解釈が分かれる、また含みの多い文章について考えると、やはりみんなそれぞれ考える点も内容も大きく違っていて、読むのがとても楽しかったです

意見文にみられる多様な読み方、とらえ方から、改めて「舞姫」という作品の特質や魅力を実感している。

②　「豊太郎」像について

意見文は９名が豊太郎を中心に書いていた。豊太郎に関する自分と同意見や違う意見の文章を読み、「人間味溢れる人物だと思った」「さらに豊太郎の人間像が見えてきたと思う」などと述べ人間観を深めている。

豊太郎を否定的にとらえていた者は、豊太郎の人間性や置かれていた環境、明治という時代性、エリスとの関係を考慮した意見文に触れ、豊太郎像をとらえ直していた。

③　独自の着眼点が見られる文章について

豊太郎とエリスの性格の違いや行動を分析的にまとめ、二人の血液型を考えていた文章に対して面白さを感じていた者が多い。やや戯画的なとらえ方であるが、生徒にとっては、人物像に関して距離感を持った分析的な見方、意外性のある設定とその設定が身近であること、説得力のある文章展開が興味深かったのだろう。

また豊太郎とエリスの関係を光源氏と紫の上の関係と関連させて考えた意見文もあり、意見文から「源氏物語」を思い出しつつ、豊太郎とエリスの関係を改めて考えたようだ。

独自の着眼点による人物像へのアプローチの仕方に新鮮さを感じている。

④　独自の視点を設定し、論を展開している文章について

「エリスの母から見た豊太郎」「エリスの目と彼女の悲しい人生」「『舞姫』の風景」というテーマで書いていた文章はそれぞれ独自の視点を設定した上で、豊太郎やエリスの人物像や人生にアプローチしている。場面の展開に沿ってエリスの母の心情を想像しまとめている文章、作品からエリスの目の描写を拾いつつ豊太郎との関わりやエリスの人生に思いをはせている文章、ウンテル・デン・リンデン、モンビシュウ街、エリスの家・部屋、冬のベルリンなどの情景描写を軸にして、出来事や登場人物の心情に言及し、「詳しく風景が描写されていた場面はこの話にとって重要な出来

事が起きる前や、起きている最中だった。作者は細かく風景を表現することで読者を話に入り込ませ、また登場人物の心情を表したのだと考えた」と作者の手法を述べて結んだ文章、に対して共感したり興味を持ったり感心したりしている。

⑤　「その後の物語」について

「その後の物語」は３名の生徒が書いていた。多くの生徒が「その後の物語」を楽しみつつ読んでいる。「舞姫」はその終わり方から登場人物のその後が気になる作品である。文章としてまとめなかったにしても、その後を想像していた生徒も多いようだ。「今までの流れから考えても納得がいく物語」ととらえたり、想像もしていなかった展開を楽しんだり、エリスが幸せを得た結末だったことに安心したりしていた。また「その後の物語」を読み、「舞姫」を「救いや自由な想像を可能にしている作品」ととらえたり、「森鷗外がその後を書かなかったことで、読者に『その後』を自由に想像させることを可能にしたのではないかとその後の物語を読んでいて思いました」という見解を示したりしていた。

⑥　文章力について

意見文の内容だけでなく、表現の仕方からも学んでいたようだ。「みんなの文章力の高さ」「表現も適確で多彩だった」「熟語を使って書くと読みやすくまとまっているように思った」「上手に日本語が書けるようになりたい」などと述べ、表現力を高めようという意識が見られた。

生徒が他者の意見文をどのように受け止めているのかを知りたいと思い、「学んだこと」を書かせたのであるが、想像していた以上に、生徒の互いに学びあいたいという意識は高かったように思う。

その意識から新しい見方を得たり、作品解釈を深めたりしている。他者の意見文を読むことで外化から内化へ向かっている。「私も次に書く機会があればもっと別の角度から分析したいと思った」「皆の意見文を読んでまた『舞姫』の世界をのぞくことが出来て楽しかった」「もう一度『舞姫』本文を読んでみたいと思う。もっと違った読み方ができるはずだ」「舞姫を読んで学んだことを、今までやこれからの生き方、考え方を考えていくのに役立てられたらなと思いました」と述べているものもあり、学んだことを言葉にすることで、生徒の内化も一歩進んだようである。

４　他者の意見文についての感想を手紙形式で書く

（１）　平成２５年度の場合

本年度の意見文のテーマは「豊太郎の人物像」「エリスに関すること・相沢に関すること」として授業者が設定し、両方を書かせた。「豊太郎の人物像」について書いたものに対して手紙文を書かせている。

豊太郎の人物像については肯定的にとらえるか、否定的にとらえるかの立場を明らかにさせ、次に「なぜなら」という書き出しで自分のとらえ方の根拠を述べさせている。

肯定の立場で書いている者が６名、否定の立場で書いている者が１１名であった。各生徒が二名に対して手紙を書いているが、一名は授業者が指定し、一名は生徒が選択している。

手紙は肯定派から肯定派に書いたものが５名、肯定派から否定派に書いたものが７名、否定派から肯定派に書いたものが１０名、否定派から否定派に書いたものが１２名であった。次のように整理した

①　肯定派の意見文と肯定派への手紙

まず肯定派６名（ａ～ｆ）の意見文の最初の一文と、その根拠として書いていたことを抜粋した。

a　私は彼の選択は取らざるを得ないものだと思ったからだ。

・目の前に、生きるか、愛を取ったがゆえに身を滅ぼしてしまうか、とういう選択肢が投げかけられたとしたら、やはり生きるほうを選ぶと思う。

・エリスへの愛を取り、共に生活したとして、いつかは冷めてしまうような気がする。

・人間そんなに変われるものではない。大臣と仕事をするうちに、自分の能力の高さ、他人と比べて秀でていると感じた彼の心には、留学生としてやってきた日々が浮かんだのかもしれないと思った。

b　登場人物の中で最も思い悩んだのは豊太郎だと思うからだ。

・初めて自分の感情に素直になって手に入れた幸せが、最終的に自分も、自分の愛する人も不幸になるという結果になり、人間としての豊太郎は深く傷ついたと思う。

・豊太郎は自尊心が強い一方、弱い心を持つ人だったから、不幸を相沢のせいにして恨むような発言をしているのは、本当は裏返しで、自分の責任を深く自覚しているが故にその重さに耐えられず逃げだしたかったのかなと思った。

c　豊太郎は、一般から見ると、最終的には、批判的に見なされやすい行動をとっているが、僕はそうするしかなかったのではないか、と思うからだ。

・このような状況で、豊太郎が、故郷へ帰るという選択をとったことは、最善とは言い難いが、仕方がないことではないのかと思う。

・豊太郎が相沢に感謝しつつも、恨んでいることも共感できる。豊太郎は、自分が悪いとは思いつつも相沢も悪いとひそかに思ってしまうだろう。というか、思わないとやっていけないのだろう。また自分がエリスを苦しめた張本人だと、認めつつ認めたくはないのだろうと思う。人間誰しもが、抱く感情で、心の内に留まらせている豊太郎を真っ向に非難できないと思った。

d　豊太郎を否定する理由がないからだ。

・豊太郎のことを優柔不断だとか、責任感がない、薄情だと言うことは簡単だが、それは誰しもが持っている弱さだと思う。ただ彼の場合はそれが一人の女性の人生を狂わせてしまう結果になっただけである。／相沢の頼みを断れなかったのは友を思うが故。友の頼みごとは断れないと言いつつもエリスと同居を続けたのは愛する人を傷つけまいとする故。結局はそれが取り返しのつかない結果を招くがが、それは豊太郎の弱さではなく優しさによるものである。そう考えると彼を責めるのはお門違いな気がするのだ。

・確かに子供のことを思うならドイツに残るべきだったかもしれない。しかし文章から読み取る限り、豊太郎にそんな状況で耐えうる精神力があるとも思えない。だから彼の決断は仕方のないものだと思うのである。／私の考える豊太郎の人物像は少し運が悪かった男である。

e　豊太郎という人物は私にとってとても人間らしく感じたからだ。

・豊太郎の場合、遠い異国の地にいて望郷の念は小さくなかったはずだ。この機会を逃してしまうともう一生故郷にも帰れず、名誉も挽回することができない。そのような思いに勝てなっかたのも納得のいかない話ではないと思う。豊太郎は理想の姿ではなく、私たちの現実を写している姿で、いつ私たちが同じ運命に遭うかはわからないが、その時にあなたはどうしますか？ということを問いかえしているように感じた。

f　豊太郎のような境遇にあれば、誰でも彼のように孤独や不安を感じたと思うからだ。

・日本にいた頃、豊太郎は自分の才能に絶対の自信を持っていた。しかし、ドイツに来て状況が一変すると自分の中に変化が起こり、豊太郎は一人ぼっちになってゆく。そんな中で自分に助けを求める美

しい少女に恋をしたことは当然のことといえると思う。他の誰もが認めてくれる人がいない中で、豊太郎はエリスに夢中になってゆく。しかし、天方伯と会ってから、自分の本来の才能を認めてくれる人を得て、自分の名誉を挽回するチャンスが訪れると、次第にエリスより日本への帰国へと気持ちが傾いていく。ただ、エリスとの間にもうけた赤ん坊を置き去りにして日本へ帰国するのはあまりにもかわいそうだと思った。豊太郎のドイツに着いてからの日々は、肯定的にも否定的にもとらえられるが、私は豊太郎を人間味の溢れた人物だと思う。

次にａ～ｆに対する手紙文の一部を抜粋する。

ａに対して否定派から〈 この意見文を読んで肯定派に心が傾いた〉〈他の視点から見ることができて新たな発見ができました〉〈豊太郎の選択が「生きる」か「愛」かというものだったというところを読んで、私自身考えが浅かったと思いました〉

ｂに対して否定派から〈豊太郎の「人間性」という部分を改めて見ることができました〉

ｃに対して否定派から〈豊太郎は肯定的に見ることもできると思いました。相沢との関係を考えると、断れなかったというのは仕方ないとも思うし、当時の豊太郎の経済的な事情を考慮しても納得できました。また相沢を恨んでいるのは、そうでもしないとやっていけないのではないかという意見に感動しました〉肯定派から〈豊太郎はそうするしかなかったという意見に共感しました／相沢に感謝と恨みの両方感情を持っていることも人間なのだから仕方ないという意見に共感した〉

ｄに対して否定派から〈豊太郎が犯した失敗は、誰もが持つ弱さから生まれたものであり、あのような状況になれば豊太郎のような行動しかできなかったのでは、とも考えることができました。しかし「一人の女の人生を狂わせる結果になっただけ」とありましたが、私はそれが最も否定すべき点だと思い、否定的に捉えた文章を書きました〉肯定派から〈○○さんの意見はとても現実的であり、豊太郎のとった行動は完全に正解で、最善とは言いがたいかもしれないが、評価できる点もあるのだと思いました〉〈全体を通して公平な視点から人物を捉えている所がとても深いなと思いました。豊太郎のなかなか表には出てこない「優しさ」を読み取れる○○さんの洞察力の高さがすばらしいと思いました〉

ｅに対して肯定派から〈私も豊太郎の行動には人間らしさを感じました。確かにすべての人間が理想的に生きるのは無理でしょう。現実に目を向けると彼のような行動をとった人は多くいるだろうなと思いました〉

ｆに対して肯定派から〈豊太郎の心の動きはとても人間的で、普段は決して他人から指摘されたくない心の奥底からの気持ちがよく現れていると思います／豊太郎の行動はどう考えてもほめられたものではないが、それでも完全に否定することはできないし、自分の心を振り返るいい機会になったと思います〉

肯定派の文章には、人物像把握の細やかさや人間観の深さが見られる。否定派から肯定派に向けた手紙には、別の視点に触れて、自身の考えを広げたり、深めたりしたことが書かれていた。ｄに対する手紙のように納得できない点について、自身の考えを述べているものもある。

肯定派から肯定派に書いた手紙の内容は主に共感であり、自身の考えの確認、深化である。

② 否定派の意見文と否定派への手紙

ｇからｊの生徒は否定する立場で書いているが、否定する理由のキーワードを次のようにまとめた。

ｇ〈エリスへの裏切り・相沢への責任転嫁・曖昧な恋愛感情で行動した心の弱さ〉ｈ〈相沢への

責任転嫁・自分勝手〉 i 〈自分本位・相沢への責任転嫁〉 j 〈エリスへの無責任な態度・相沢のせいにしたのは人のせいにしなければ押しつぶされそうでやりきれない思いがあったから〉 k 〈エリスへの無責任な態度〉 l 〈エリスへの無責任な態度・相沢を批判する思い〉 m〈自己中心性〉 n〈自分本位・意志や責任感のなさ〉 o 〈エリスを残して帰国するという行動〉 p 〈相沢への責任転嫁・名誉挽回のため帰国する自己中心性と無責任〉 q 〈相沢への責任転嫁・人生の選択において自身が決断できなかったこと〉

否定する理由はどの生徒もあまり変わらない。したがって否定派から否定派に書いた手紙の内容は、ほとんどが否定する理由に同感するというものだった。

肯定派から否定派への手紙については一例を挙げるが、一部肯定しつつ、手紙の中で自分の考えを語り、自身の作品解釈を深めているものである。

> 私は豊太郎のことを肯定的に捉えているから〇〇さんの意見に賛同はできないけれど、確かに彼はもう少し考えてから答えるべきだと思いました。最後の場面で豊太郎が相沢に責任転嫁しているのが最悪だと述べているけど人間誰しもが持っている悪い側面だと思うから、そこは見逃してあげてもいいのでないかと思いました。だってこれは全て彼の日記に書かれたことだから。豊太郎が他の人に「相沢が悪い」と話していたら流石に救いようがないけど、あくまでこれは日記であるから、そこは豊太郎が自分が責任に押し潰されないようにとった心を守るための逃げだと思います。彼も自分が壊れないよう必死だったのだと思います。

否定派の中でmは、場面に沿って細かく分析しながらまとめ、自己中心性も人間誰にもありうることだとしていて単に否定しているわけではなかった。全文を次に挙げる。mに手紙を書いた者は多かった。

> まずｐ二三〇・15 エリスが妊娠したことを知った時の豊太郎の内心、この辺りから豊太郎に徐々に不信感を覚えました。子供が出来たことを喜ぶ風もなくただひたすら自身の行く末だけを案じているからです。／二つ目に、「エリスと交際を絶つ」と相沢に宣言した場面、例え友人の提案を断れない性分であっても結果的に選び、宣言したのは豊太郎自身です。にも関わらず、それを踏まえて天方伯に伝えた相沢に対して「相沢の言を偽りなりとも言い難きに」と思っているのもおかしいと思います。／三つ目に、天方伯と日本へ帰ることを約束した後の豊太郎の様子ですが、ホテルを出て錯乱している様子も個人的には「何を今更…」という感じです。もはや高熱で倒れたことさえ一種の現実逃避—エリスに真実を伝えることを他人まかせにして、自分が決定打を打つことから逃げるためだったかのようにさえ思えてきます。これは考えすぎかもしれませんが。しかし案の定、豊太郎の代わりに事の顛末をエリスに告げた相沢に対して「この恩人は彼を精神的に殺ししなり」と、エリスがおかしくなったのは豊太郎に裏切られたからなのに、それを伝えたことに原因をすり替えて相沢のせいにしています。／そして最も決定的なのは、物語の最後の一文です。ついに最後は相沢への憎みでエリスへの謝罪や自分がしたことに対する反省は一言も出てきませんでした。この一文で豊太郎という人間の本質が分かると思います。／巨大な国家に押しつぶされる個人の意志という背景はあるかと思いますが、今も昔も自己中心的な人間の性というのは大差ないなと思いました。まあ自分が一番可愛いですよ。自分あっての他人ですからね。でもそれを克服する努力と気づく聡い心は必要だと思います。豊太郎はもちろん無自覚ですし、私たちもそうなのだろうと思います。それを気付かせるための作品ともとれるかもしれません。

mへの手紙には次のようなことが書かれていた。

> 〈最後の一文にはエリスの記述がなく、それが豊太郎の人間性を表しているという考えが面白いと思いま

した。／／豊太郎はエリスを見捨ててしまった手前、言い訳や未練がましいことは言える立場ではないからあえてエリスのことを書かなかったのかもしれないと思います〉〈エリスが妊娠したところから豊太郎に不信を覚えたという意見にはなるほどと思った。／／高熱を出したのも一種の現実逃避だという意見がおもしろいと感じた。自分でも気付かないうちに、豊太郎は逃げ道を探していたのかもしれないと思った〉〈四つの点に分けて自分の考えの裏付けを行っていたので非常にわかりやすかったです。ただ豊太郎を批判するだけでなく現代の自分たちと比べていて、ただの物語としてだけでなく、自己啓発するものとして捉えているところがよかった〉〈誰しも持っている利己心に気づかせてくれる作品なのかもしれません〉〈自己中心的な豊太郎から、今も昔も変わらない人間の心理というのは確かにそうだと思った。私が全く考えていなかった部分に着眼点をおいてあり、とても納得させられた〉

ｍの意見文を読んで、自身が考えてもいなかった着眼点、現代の自分たちに引きつけた読み方、時代を超えた人間観に着目している。他者の細やかな分析に誘発され、自己認識や人間認識を深めていた。

（２）　平成２９年度の場合

一人一人が二名に対して手紙を書いている。一名は授業者が指定し一名はそれぞれが選択している。他者に対する手紙では、共感や納得、自分とは違う視点に対する驚きや興味、新しい見方ができたことへの感謝、深い理解・文章の展開のわかりやすさへの賞賛、疑問の解決、などの思いが述べられていた。

意見文は、豊太郎を中心に書いていたもの（Ａ）が１０名、エリスを中心に書いていたもの（Ｂ）が５名、相沢を中心に書いていたもの（Ｃ）が３名、筆者の意図について書いていたもの（Ｄ）が５名、その後の物語を書いていたもの（Ｅ）が１名であった。それぞれのタイプの意見文に対してどのような手紙を書いていたか、いくつかの例を取り上げながら考察していきたい。

（Ａ）<u>豊太郎について</u>

１０名の文章に対して手紙を書いていたのが１５名である。

豊太郎は変わることができたのか、できなかったのかは授業中でのやりとりでも活発に議論され、意見文でも多く取り上げられている。「彼は、ドイツに来て、大学で様々なことを学び、そして、自分なりの考えを持ち、変化があるようにも見える。しかし、彼の性格は何一つとして変わってはいなかったのである。／自由を求め国を飛び出し、変わろうとしたが、結局操り人形のままだった」「後に彼にとっても一点の翳となったエリスとの出会いなど様々な経験を積んだ彼の心は変わったのだろうか。私はこの問いに対して、変わろうとしていたが結局変わることを拒否したと考える／彼は長い葛藤の末、今までの自分であることを選んだのだ」「中途半端に変わってしまったのだと考える」などの考え方に対して興味を抱いたり、共感や納得したりしている。

次に挙げる文章は豊太郎の変化について独自の見方を示しているものである。

私は、この物語の主人公である太田豊太郎は、ドイツへ留学したことによって変わることができたのではないかと考える。／まず、本文の初めの部分、つまり豊太郎自身の生い立ちの説明、ドイツに渡航して間もない頃が描かれた文を見てみると、豊太郎は立身出世を第一に考え、華やかなウンテル・デン・リンデンにも心を動かされないようなとても堅物な人間であったことがわかる。しかし、三年間のドイツの大学での学びを通して、今までの自分や、上司が間違っていると考えるようになり、三年前の豊太郎とはがらりと変わっている。この時点で太田豊太郎は昔の自分から変わってしまっているのだ。／しかし、この

後、出会ったエリスを捨て、豊太郎は立身出世の道を選ぶ。このことから、結局豊太郎は出世欲を捨てられず変わることができなかったと考える人もいると思う。だが、私はそれは違うと思う。たしかに豊太郎は友達や上司に言われるままに日本に帰ってしまうような男ではあるが、ドイツに発つ際の母親との別れにもたいした悲しさを感じなかったのに、帰国する際、置いてきてしまったエリスのことを考え、「腸日ごとに九廻す」と記すほど後悔の念を抱いていることを考えると、これは豊太郎が変わったということではないかと思う。もし豊太郎が変わっていなかったなら、これほどつらい思いをしていないのではないだろうか。／けれども、豊太郎の変化は決して豊太郎にとって良いものではなかったのかもしれない。下手に変わってしまったために、今後もこのつらさと後悔を抱えていかなければならなくなったからだ。

この文章に対する３名の手紙文には次のようなことが述べられていた。「豊太郎が変われたか否かについて、帰国の途についた際の後悔から変われたと考えていた点に驚きました」「私は、豊太郎は変われなかったと考えていたのでもう一度考えさせられました。また変われたからよかった、のではなくその変化がよいものではなかったという考え方がおもしろいと思いました」「ぼくは豊太郎は変わりきれていないと思っていたけどこの文を読んで『変わった』という見方もありだなとな思いました。結局エリスをおいて帰ってしまったけど、その心情がドイツに来る前と後で比較されていて、豊太郎の変化を分かりやすく感じ取ることができました」とあり、自分とは別の見方に触れ人物像のとらえ直しをしつつ、人間観を広げていた。

次の文章は青年期を生きる豊太郎像をまとめたものである。

青年期とはとても生きづらい時期だと思う。自分の意志が段々と芽生え、それまで当たり前のように聞いていた学校の先生や親などの目上の人が言うことに素直に従えなくなる。そして、やりたい事とやらなければいけない事との間で、欲と責任の葛藤により苦しみを覚える。／太田豊太郎もそのうちの一人だ。当時の日本に比べて自由な空気を持つドイツに渡ったことにより、自我に目覚め、エリスという女性に恋をした。しかしその女性は残念なことに卑しいとされる「舞姫」という踊り子をしていた。自我に目覚める前の豊太郎なら、友人の相沢謙吉の言うとおりに、エリスと別れて、迷うことなく出世を取っただろう。しかし、自分の意志としては愛するエリスと生きていきたい。まさに青年期の迷いだ。／人は急には生き方を変えることができない。だから自分の意志をはっきりと尊重することができないような、足元の不安定な青年期が存在するのだと思う。それが豊太郎の言う弱さであり、相沢とエリスという相反する存在が、さらにその弱さを引き立てている。作者がこの話を書いた理由はよく分からないが、似通った気持ちを持つから高校の教材に取り上げられているのだろうと思った。そして、豊太郎はついに最後まで、自分がこれからどうするかの選択を決めることができず、しかもその失敗を相沢のせいにしている。これもまだ青年期の途中にいるということを表していると思う。／豊太郎のこれからのことは誰にも分からない。しかし、私は人は誰もが一度、このように大きな失敗や挫折をすることで成長しているのだと思う。だから、豊太郎もこの苦しみが少しずつ消えていくにつれて大人になっていく、これから変わっていくことができるのだと思う。

この意見文に対しては４名の生徒が次のような手紙を書いていた。〔意見文の内容が小説の主題に近いと感じたことを述べた後「豊太郎はその青年期のまっただ中にいて、自分の心の弱さや意志の弱さに負けて最悪の結果をもたらしてしまいました。しかし、僕は、青年期だからといって自分の重要な選択を間違えたり、自分の決断に責任をとれないようなことはあってはならないと考えます」のように、自分に引きつけて考えを述べているもの〕〔書き出しの一文に興味を持ち、「人は急

には～それが豊太郎の言う弱さであり」の箇所に共感し、「皆とは違った着眼点がおもしろかったです」と結んでいるもの〕〔おもしろい見方だと共感し「社会に出る（豊太郎の場合はドイツに行く）となると、自由な環境の中で価値判断はすべて自分自身に委ねられてしまい、それまで自分といかに向き合ってきたかが問われるのではないかと思いました」と結んでいるもの〕〔意見文を読んで青年期の特徴に豊太郎が当てはまっていることに気づき、「なぜ舞姫が高校の教材に取り上げられているのかと、という疑問を持っていましたが、青年期である私たちに向けられたメッセージであるということが分かりました」と結んでいるもの〕であり、意見文の内容に共感しつつ青年期を生きている自身を見つめ直し、青年期における選択、責任についての見解を述べている。

（B）エリスについて

エリスを中心に意見文を書いていたものは５名だったが、１６名の意見文に対して１４名が手紙を書いている。エリスについて筆者は細かい心理描写をしていない。描かれていたのはエリスのたたずまいや行動、豊太郎や生まれてくる子に対するまっすぐな心情などである。エリス像については話し合いの中でも正反対の考えが出されたりしたが、豊太郎の人物像に関わるやりとりと比べるとエリスについてのやりとりは少なかった。手紙文が多かったのはそのためでもあるだろう。

精神を病むまでのエリスの心を推測し、まとめている意見文を読んで、そのエリス像に納得したり、エリスの視点で作品を考察している文章に面白さを感じたり、「舞姫の悲劇レベルが増す」などの感想を述べたりしていた。意見文には、深読みになるかもしれないが、個性的な見方によるエリス像がまとめられているものがあった。

「エリスの狙いと豊太郎」というテーマで書かれていた意見文では、「エリスは全部考えていたのだと思った。豊太郎との出会いは偶然ではない。まず出会いの場面で、『着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず』とあり、ドイツ人でもない豊太郎に話しかけられた瞬間家族のことを話し出す。生活苦なのにきれいな服で、外で泣き、金持ちそうな外国人に助けを求める。全部エリスの想定内のことではないだろうか」のようにエリスの行動から計算を読み取っていた。また豊太郎もそのことに気づいていたのではないかと捉えていた。この意見文に対しては５名が手紙を書いている。可憐で純粋なエリスでなく計算高いエリス像を述べている文章に対して、手紙文ではその読み方をおもしろく感じ共感したり、また、エリスの父親を思う純粋性、豊太郎への執着に触れたり、エリスの計算・演技があったとしても、終始一貫していることではなく、豊太郎への愛・執着は本気だったと考えたりするなど、別の見解を示したりしている。

次の文章はエリスの父親への思いを推測し、そこから豊太郎への思いをまとめているものである。この文章に対しては５名が手紙文を書いていた。

> 私はなぜエリスがあれほど豊太郎に執着してしまったのかについて考えたいと思う。私にはエリスの行動が常に父親の面影を探しているかのように思われた。／そこでまずエリスの父親の人物像について考察していきたいが、それは父親が死んだ後の周囲の様子から推測できる。母親は娘を打ったり、初対面である豊太郎に対し敵意をむき出しにしたりとかなり気性が荒くなっている。エリスは母も座頭も誰一人自分を愛してくれない、と絶望しながら道の真ん中で泣いていた。このような行動から父親はエリス一家の精神的支えで、エリスに愛情をそそいでいた唯一の人物だったと考えられる。エリスに愛情をそそいでいた、というのは舞姫たちの中でエリスのみが父に守られ「賤しき限りなき業」に堕ちなかったことからも推測できる。／そして父が死んだ後、エリスに愛情をそそぎ、精神的支えとなったのは、豊太郎であった。ここでエリスが父の面影を豊太郎に追ったのは自然なことだと思う。そしてエリスは豊太郎に夫としてではなく父親として存在してもらいたかった。だからこそ、妊娠した後から急激に豊太郎への依存度が

高くなっていったのだ。「あともう少しで子供も生まれて私の求める父親としての豊太を手に入れられるのに…こんな所で逃げられるのは嫌だ」と思っていたのだろうか。子供を教会に入れる日を想像して涙を流すシーンでも、きっとエリス自身が初めて教会に入った日の父の様子を思い浮かべていたのだろう。／このように、エリスは豊太郎と父親を重ねてしまったがために、豊太郎に病的にまで執着するようになったのだと思う。

手紙文には、新しい見方からエリス像への理解を深めたこと、エリスが豊太郎に惹かれた理由が分かったこと、文章に説得力があったこと、よく考えていることに感心したこと、エリスの豊太郎への思いは意見文に書かれているようなことでは片付かないのではないかということなどが書かれていた。生徒は意見文を読んで改めてエリスについて考えをめぐらせたようである。

（C）相沢謙吉について

３名の意見文に対して５名が意見文を書いていた。

次の文章は「相沢謙吉は悪なのか」と問いかけ「相沢は豊太郎にとって友達思いの良い友達であったと考える」と結んでいるものである。

豊太郎の大学時代からの友人であり、エリスを狂わせてしまった原因でもある相沢謙吉は悪なのか。／舞姫の本文の最後は「我が脳裡に一点の彼を憎む心今日までも残れりけり」と豊太郎が相沢に対する憎しみを語ってしめている。／たしかに豊太郎が愛していたエリスに対して、豊太郎の大臣に隠していた事実を話し、エリスを生ける屍へと変えてしまったのはまぎれもなく相沢である。豊太郎が相沢を恨むのも納得はできるが、少し理不尽ではないだろうか。豊太郎はそもそもエリスに結局は仕事のことや日本へ帰ることを伝えることができず、そんな友人のために相沢は代わってエリスへ伝えてくれたのだ。きっと相沢でなく豊太郎から話していたとしても同じような結末になったのではないかと思う。伝えたのが誰がではなく、伝える内容、豊太郎がエリスを裏切ってしまっているという事実がエリスを狂わす原因なのである。つまり相沢は悪くない。／また、この物語での相沢は、本当に友達想いの良い人である。大学時代の友人のために新聞の仕事を与え、伯に紹介し、そして結果として豊太郎が大臣の信頼を得ることができたのもきっかけをつくったのは相沢である。相沢は自分の信用がもしかしたら失われてしまうかもしれないというなか身をていして豊太郎を救ったのだ。エリスに事実を伝えたのも話せない豊太郎のためを想ってである。主人公に恨まれる筋合いなどない。ただ、このような悲劇を生んだ原因としてあげられることは、二人の考え方の違いだと思う。豊太郎はドイツ留学を通して恋愛や自由な考え方をもちはじめたが、相沢は日本の家を大事にするような考え方を持っていた。そのためエリスより仕事を取るという行動に迷いなく豊太郎を導いていったのだ。／このように相沢は豊太郎にとって友達想いの良い友達であったと考える。

この文章に対しては「相沢謙吉を豊太郎目線で見ると彼は悪となるかもしれないが第三者の目線で見ると意見文にある通り、やはり良い人であったのだなと思いました。／伝えたのが誰がではなく伝える内容がエリスを狂わす原因という文を読んで、なるほどと納得しました。また相沢と豊太郎の考え方の違いに注目していることも、二人を理解する上でとても分かりやすかったです」と共感、納得しているものや、「私はたしかに相沢は悪ではないと思います。良い人でもあると思います。しかし豊太郎にとっての良い友達ではなかったのではないかと思います。／豊太郎の目には、人のプライベートにずかずかと入ってきて彼女を精神崩壊させた「悪い」友達というふうに映っていたのかもしれません」と相沢について豊太郎の立場で考えてまとめたものがあった。

相沢についての意見文には、次のような相沢の思いを言及しているものがあった。〔家や国を重視していた時代にあって自由な恋愛をした豊太郎に対する相沢の嫉妬〕〔エリートの道を歩んでいる相沢の、ドイツの自由な雰囲気に感化され始めた豊太郎をうらやましく思う気持ち〕である。

それに対する手紙文は、考えてもみなかった相沢像に意外性を感じつつ納得し、それならば豊太郎は相沢の嫉妬に気づいていたのかと疑問を投げかけたり、「舞姫」読後、相沢に怖さを感じていた者が怖さの根拠を確認し共感したりしているものであった。

（D）筆者の意図について

６名の意見文に対して７名が手紙文を書いている。

意見文では豊太郎の姿を森鷗外に重ねつつ、明治という時代を生きた鷗外の思いについて考えられていた。次にそれらの意見文の一部を引用する。

私は、豊太郎は当時の欧化政策の犠牲者の一人として書かれていると感じた。豊太郎は外国の文化に触れ変わったように見えたが、いざとなるともとの自分を捨てきることができなかった。中途半端な変化のせいで周りも自分も苦しめた。どんなに外国の文化を取り入れていっても、中途半端に日本と外国の文化が混在してしまうとかえって混乱してしまう。近代化から遠のいてしまうだろう。このことを懸念した森鷗外が当時の近代国家を目指して欧化政策を行う日本政府に対して批判的に書いた物語であるのではないか。
当時の日本は明治維新により国が大きく変わり、西洋との結びつきも一層強まっていた。物語の中で、豊太郎はドイツで自由な気風に触れ今までの自分と大きく変わろうとしていた。この部分が豊太郎と当時の日本が重ねられていると思った根拠である。これを考慮して、物語を最後まで読んでみると、森鷗外は当時の日本に対しある疑念を抱いていたようにも考えられる。物語の最後では、豊太郎はエリスとの恋愛ではなく今まで追い求めてきた立身出世の道を選んだ。このことから、森鷗外は、当時の日本政府などに対して外国との結びつきを強めることが本当にできるのかと疑問に思っていたとも捉えられる。
遅れている日本に対して、自由な気風を広げていこうとする意図があったのではないかと思う。

これらの考え方に対して手紙文では同感、納得の意を示していた。さらに「森鷗外の意図はこれだけか」「『現在の私たちはどうなのか』か、日本の文化が薄れている現状についても少し考えさせられました」など、問いかけをしているものもあった。。

また意見文には「森鷗外はこの作品を通して、人生は自分が思っているように上手く運ぶことはないということを伝えたいのではないかと思った」という考えを示しているものもあり、それに対して手紙文では、書き手の考えを理解しつつ、「確かに、一見人生を円滑に運べるようなスキルを持っていたとしても、何か別の一面やほんのささいな偶然—豊太郎の場合はその優柔不断さとエリスとの出会いでしょうか—によって芳しくない結末に行きつくことがある、というのは私たちにも当てはまることかもしれません」とさらに自身の考えを深めていた。

（E）「その後の物語」について

１名の生徒が「Ａｆｔｅｒ舞姫」と題してその後の物語を書いている。擬古文で、「舞姫」本文から自然につながるような巧みな文章であったので、生徒は感嘆しつつ、「物語」を楽しんで読んでいた。５名の生徒が手紙文を書いている。

程すぎて房奴の来て電気線の鍵をひねる音すなり。はや一時間が過ぎぬ。船より出でてセイゴンの港を見れば遠く離れし伯林、幻かと思ふ。ホテルに戻りて骨牌仲間はいまだ寝ぬらむと思へれば交わらむもわ

ずらわしければ港近くの公園で一夜を過ごしつ。セイゴンを出でてより十日、つひに我が故郷に着きつ。五年ぶりの我が家は母を失ひて、時が止まりしごとく荒みたり。ひと月過ぐすほどに天方伯より君が学問を用ゐん、疾く来たまへと言ふ手紙を得しに、ひげを整え伯のもとへ向かひき。伯のもとにはすでに二、三人が揃へり。余はその中に相沢を見つけたり、我が親愛なる罪人を。彼は余を見附、よくぞここまで来にけり、他の留学生ならばえ成し遂げじと言ふ。余は憎悪の念が色に表れぬよう彼に問ふ、「いかでエリスに余の帰国を伝えにけり。君がために余とエリスはあかぬ別れをしにけり。彼と共に我が故郷に帰らむと思ひしものを。」／彼はかの余をいさめし時のごとく色を正して言ふ。君が弱き心は伯林でも君を苦しめし。エリスと言ふ女にはただ君の我に言ひしことを伝えしのみ。彼を壊ししは君が弱き心なり。君は学識、才能ありて、一少女の上にかきくらすより今ぞ伯の信用を確かにし、名をなすべし、と。／相沢と会ひしより二、三か月が過ぎ、早朝、余が郵便受けに一通の手紙ありて見れば伯林の消印なり。夏が近づきつるものの余が顔にひやりとする風が当たりつ。エリスが手にて書かれたることは余を地へ落とし入れたり。／余とエリスとの愛の証は失われつ。エリスの消息はこれより途絶えたり。

次はそれぞれの手紙文の一部である。

〇最後に子どもがが死んでしまった意図は何だったのか、私にはわかりませんが、豊太郎の終わり方はきっとバッドエンドだろうと思っていたので納得しました。また相沢の人格も舞姫のまま描かれていてぶれないなあともいました〇森鷗外のように情景描写もたくさんあり、本当にこのような続きがあるのではないかと思うほどでした。「我が親愛なる罪人を」という文は豊太郎の思いをとても鋭く表現しているなあと思いました。／とても含みのある終わり方で様々な想像ができて面白いと思いました〇この文いとをかしければ、ソファに座りて読みたし〇森鷗外本人が書いたかのようなクオリティの高い擬古文で書かれていて驚きました。自分が特に好きな表現は「我が親愛なる罪人」の部分です。豊太郎の相沢に対する心情がとても正確かつ端的に表されているなあと思いました。エリスから送られてきた手紙にはおなかの子が死んだというような内容が書かれていたのでしょうか。手紙の内容も含めて続きがとても気になりました
〇豊太郎が相沢に対して抱いている感情や本編で語られていない豊太郎の思いの補完がよかったです

生徒は、特に豊太郎の相沢への思いが端的に描かれていたことと、含みのある終わり方を高く評価していた。物語を読むことで心情把握を深め、また次の展開に想像力を膨らませているという点に生徒の内化活動が感じられた。

５　おわりに

他者の意見文を読み合う中で、共感や捉え直し、新たな発見など、生徒には様々な内化活動が生じていた。それは作品に対する深い理解、そして自己認識や人間認識の深まりにつながっている。まとめ学習の過程において、相互交流の効果を感じた。

まとめ学習はそれまでの学習の積み重ねの上で成り立っている。生徒の実態に応じて、どのような場、どのような方法で、内化と外化を繰り返すかということが授業を構築する上で重要なことだと思った。

（広島大学大学院教育学研究科研究生）